

ガレス・エヴァンズの非概念主義と所与の神話

菊池 聡 (Satoshi Kikuchi)

所属 千葉大学

知覚論において関心が向けられる問題の一つとして、知覚の内容は概念的であるのか、非概念的であるのかという対立がある。前者は概念主義と呼ばれ、後者は非概念主義と呼ばれる。概念主義を提唱する代表的哲学者はジョン・マクダウェルである。そして、マクダウェルは、非概念主義者の一人としてガレス・エヴァンズの主張を取りあげ、エヴァンズの主張は所与の神話に陥っていると批判している。所与の神話とは、ウィルフリッド・セラーズによって提示されている議論である。この議論を理解する為に、まずは所与と呼ばれているものについて述べることにする。

主体が世界から受け取っている情報が、世界についての知識となり得る信念や判断を形成する基礎として機能する際、それは所与/与件 (given,data) と呼ばれる。所与という考えは、理論の確実性を保証する為に究極的な基礎として要請されたものであり、一切の理論から切り離されたものとして捉えられる。ここにおいて、所与は非概念的であり、それゆえ概念的対象である信念や判断を保証するものとして考えられる。

このように経験は非概念的な所与を受容することであり、理論は非概念的な所与によって基礎付けられていると考える立場を、本発表では「典型的な非概念主義」と呼ぶことにする。私がこの立場に対して「典型的な」という形容を行う理由は、エヴァンズの非概念主義と区別したいからである。

この典型的な非概念主義において考えられる非概念的な所与こそが所与の神話批判において批判される考えである。セラーズは、規範的枠組のうちに物事を位置付けることと自然科学における因果関係のうちに物事を位置付けることとを区別している。マクダウェルは、この区別を受け入れ、前者が理由の論理空間 (the logical space of reason) において位置付けられており、後者が自然の論理空間 (the logical space of nature) において位置付けられると区別している。典型的な非概念主義における描像は、概念領域の外部から取り込まれた非概念的な所与が信念や判断を正当化するというものである。しかし、非概念的な所与は理由の論理空間ではなく自然の論理空間に位置付けられており、信念や判断を正当化し得るものではなくなる。それゆえ、非概念的な所与はその役割を果たし得ないこととなる。

マクダウェルは、エヴァンズの主張が所与の神話に陥っていると批判する。この批判を理解する為に、まずはマクダウェルの捉えたエヴァンズの描像を述べることにする。

主体は知覚において、非概念的な情報を取り込み、情報システムが役割を果たした結果として非概念的な情報状態を形成する。情報システムとは、知覚、伝聞、記憶において行使されている諸能力の体系のことである。その情報状態はある表象内容を伴っている。それゆえ、一見すると知覚経験と情報システムとを同一のものとみなすことが出来ると思われるかもしれない。しかし、思考から独立に産出される情報状態が

直ちに経験として成立するという訳ではない。それが可能となるのは、「ある思考、概念適用、推論システムへの入力」においてのみである。ここにおいて、初めて概念的内容が登場することとなる。エヴァンズは、この概念的内容は、非概念的内容に「基づいている **based upon**」と述べている。すなわち、概念的内容を持ち出す際に、それは情報システムにおいて獲得された非概念的な表象に基づいているということである。このことからエヴァンズの主張の要点は、判断を形成する能力よりも、情報システムの働きの方が原初的であるという点にあると考えられるだろう。これが、マクダウェルの捉えたエヴァンズの描像であると言えるだろう。

ここで、マクダウェルは、エヴァンズの主張は所与の神話に陥っていると述べている。というのも、エヴァンズは情報システムの働きにおいて既に表象内容を認めてしまっているからである。すなわち、たとえ非概念的内容とは別種の内容として概念的内容を認めていたとしても、情報状態において思考の如何なる働きからも独立に、非概念的表象内容を認めてしまっているからである。経験の内容が思考の働きから独立に産出されているという考えと、思考と実在との連関とをともに維持しようと試みるならば、非概念的な所与が判断を正当化する為の究極の根拠として機能しているという考えに導かれることとなる。すなわち、エヴァンズが述べている「基づく」という言葉の意味を正当化の関係として理解しなければならないということである。そして、「基づく」という言葉の意味を正当化の関係として理解するならば、それはまさに所与の神話に陥ることとなる。

しかし、私にはマクダウェルによるエヴァンズ解釈がエヴァンズの主張を正確に捉えたものであるようには思われない。というのも、マクダウェルによるエヴァンズ解釈は、エヴァンズの「認知地図(Cognitive Map)」や「一般性制約(Generality Constraint)」等に関する主張を欠いた解釈となっているからである。

本発表において私は、エヴァンズの主張の諸論点が有機的な連関を有していることを示すことにより、エヴァンズの議論を正しく解釈し、それがマクダウェルの批判を免れていることを示したい。その際に、エヴァンズが「基づく (**based upon**)」という言葉によって述べていることの意味を正当化の関係として解釈するのではなく、「資格付与 (**Entitlement**)」の関係として解釈し得るということを示すこととなる。

参考文献

Evans Gareth, *The Varieties of Reference*, ed. John McDowell, (Clarendon Press, Oxford, 1982).

Evans Gareth, *Collected Papers*, (Clarendon Press, Oxford, 1985).

McDowell Jhon, *Mind and World: With a New Introduction*, (Harvard University Press, 1996). (ジョン・マクダウェル、『心と世界』、神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳、勁草書房、2012年)

野矢茂樹、『語りえぬものを語る』、講談社学術文庫、2020年

Sellars Wilfrid, *Science, Perception and Reality*, (Routledge & Kegan Paul, 1963)(W.S.セラーズ、『経験論と心の哲学』、神野慧一郎・土屋純一・中才敏郎訳、勁草書房、2006年)